

司会者：はい、ありがとうございます。それでは時間の関係で最後のご発題をお願いします。藤田先生お願いします。

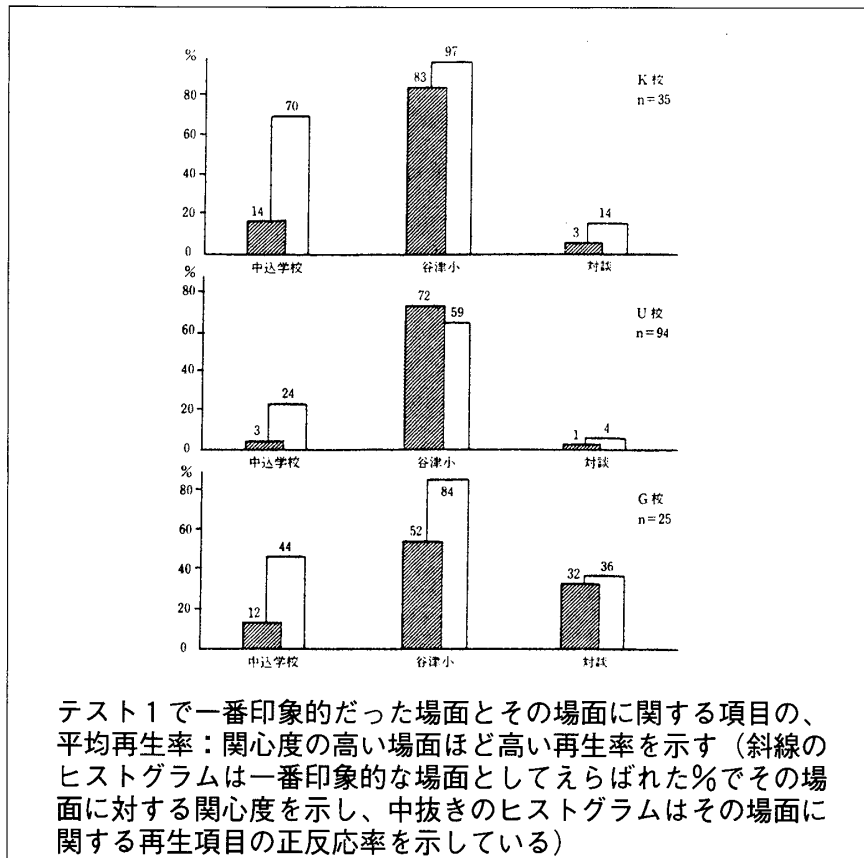
ビデオ教材における視聴覚情報提示と学習

藤田 恵壘（聖心女子大学教授）



藤田：聖心女子大学の藤田でございます。私は今年の3月までこのセンターで、映像教材の研究をやっておりましたから、今回はこのセンターで主に放送大学の番組分析などを中心として行ってまいりました映像学習の効果についてデータをお示して、皆様のご検討のご参考に供したいと思っております。

お渡ししてある資料にもありますように、視聴者の関心が高い映像というのは、視聴者がそこから多くの情報を受け取ることになるので、非常に再生されやすい傾向があります。後から視聴テストでも非常に高い再生率が得られます。ですから関心の高い番組ほど学習効果が高いことになります（図VI-1）。

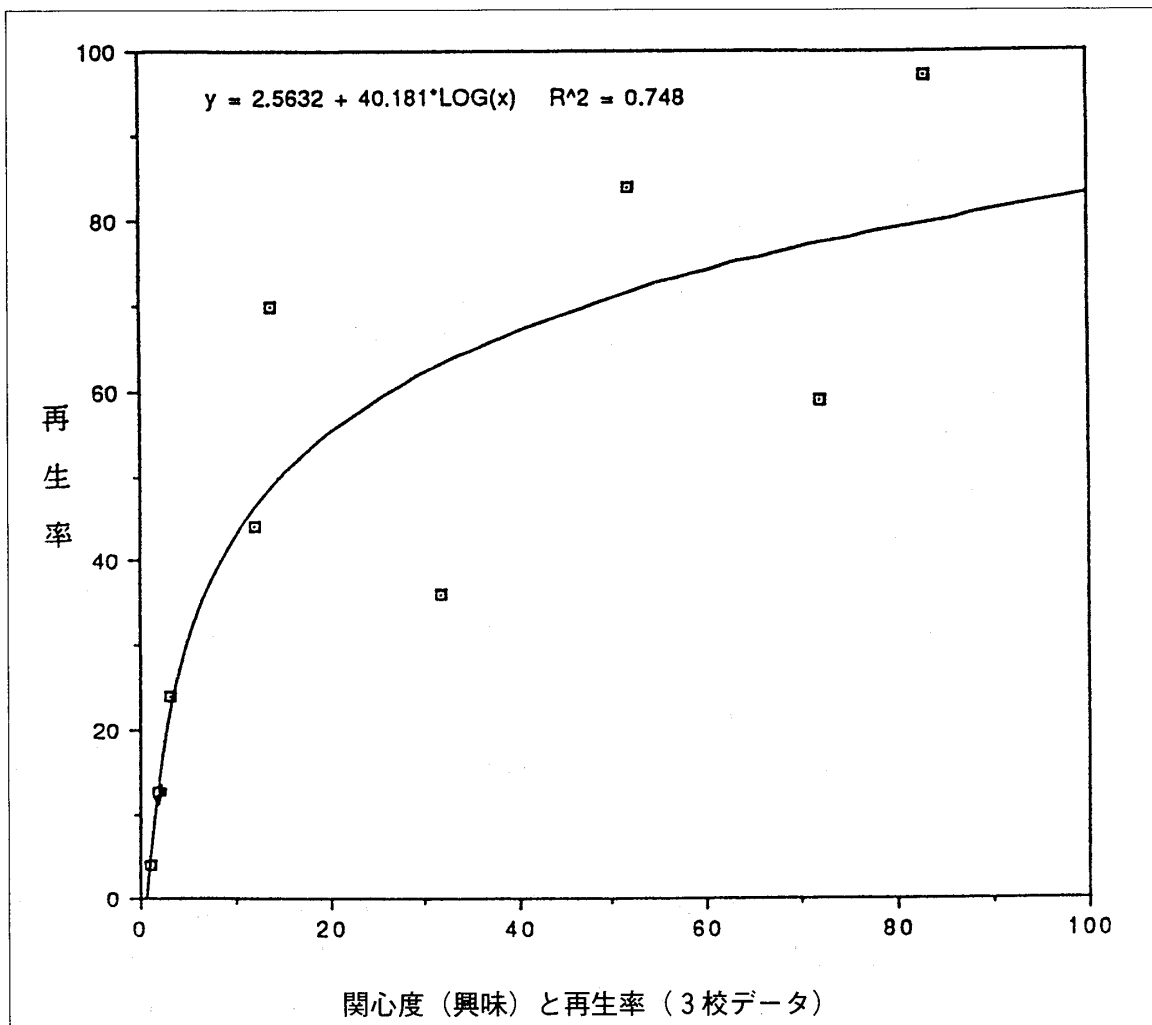


図VI-1

この2つの大学（U，G校）と1つの専門学校（K校）で行った調査です。

この番組は、「日本の教育」という放送大学の45分の番組ですが、最初は明治の初期に創られた小学校の校舎が、教育博物館になってまして、そこでロケをして、番組の主任講師とその館長さんとの対話によって、日本の教育の歴史が語られるわけです。それから場面が展開しまして、今度は千葉の有名な谷津小学校のオーケストラの活動が紹介されます。ここではオーケストラを指導されている先生と子供達との話し合いや、主任講師のインタビューがありまして、最後は主任講師とある有名な教育行政の専門家の中で、日本の教育を国際的な視野からみた対談がございまして。

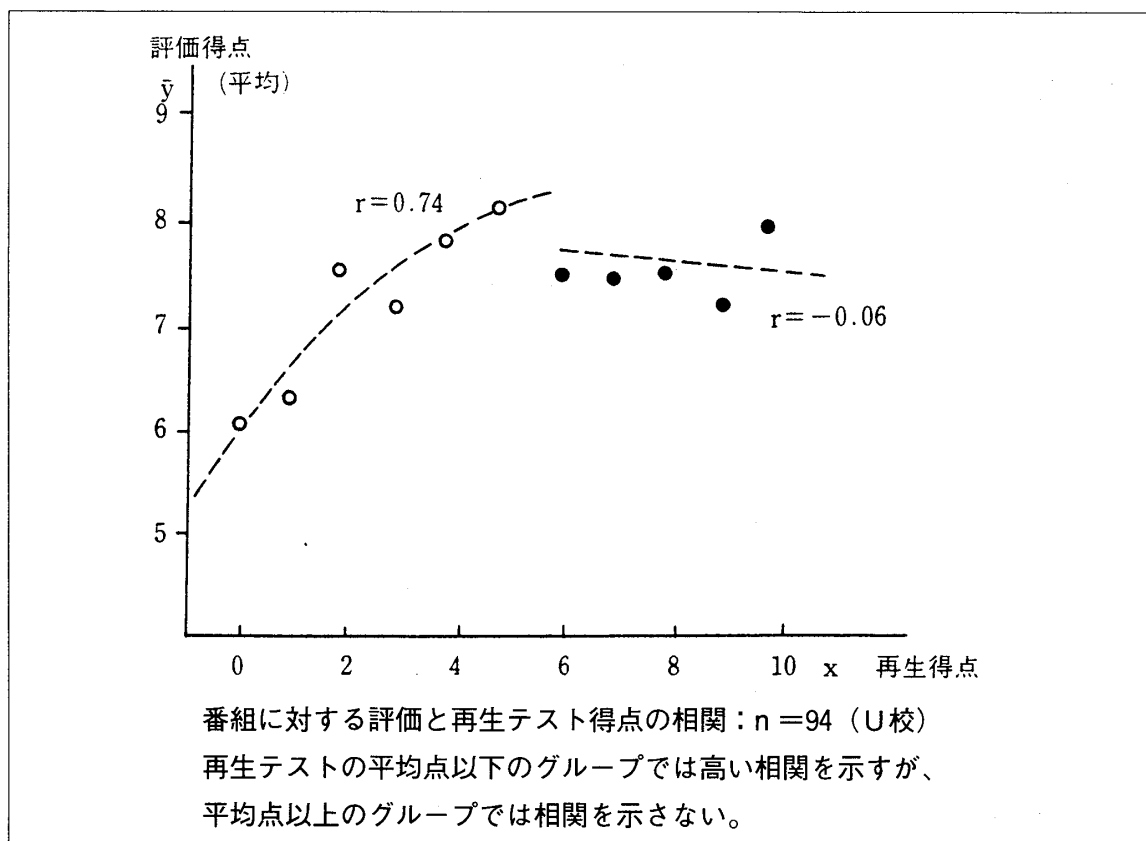
視聴した3グループとも子供達のオーケストラの活動が一番印象に残ったと云っているのを斜線の部分が%で示しています。ただ面白かったというだけではどれだけ情報を得ているのか分かりませんので、その場면을きちんと見ていなければ決して答えられないような問題を作って、再生テストで調べております。K校の場合ですと、谷津小学校のオーケストラが一番面白かったと83%が答えているのですが、白抜きの部分で示されるように、その場面に関連する問題の6問の平均正答率は97%で、ほとんどみんな正解しているのです。少し変動はありますが、一般的に関心度と再生率には高い相関があります（図VI-2）。



図VI-2

全体を調べてみますと関心度と再生率はリニアではありませんけれど、関心が低い時にはほとんど再生することができませんが、関心が高くなってまいりますと、はっきりと上昇して80%を超える場合が出てきます。このように、番組というのは視聴者が関心を持つ内容でなければいけない、ということが非常にはっきり出たわけです。

今度はその番組の評価得点と再生得点の関係を調べてみますと、やはり再生率が高くなるほど番組に対する評価は平均的に高まってきます（図VI-3）。

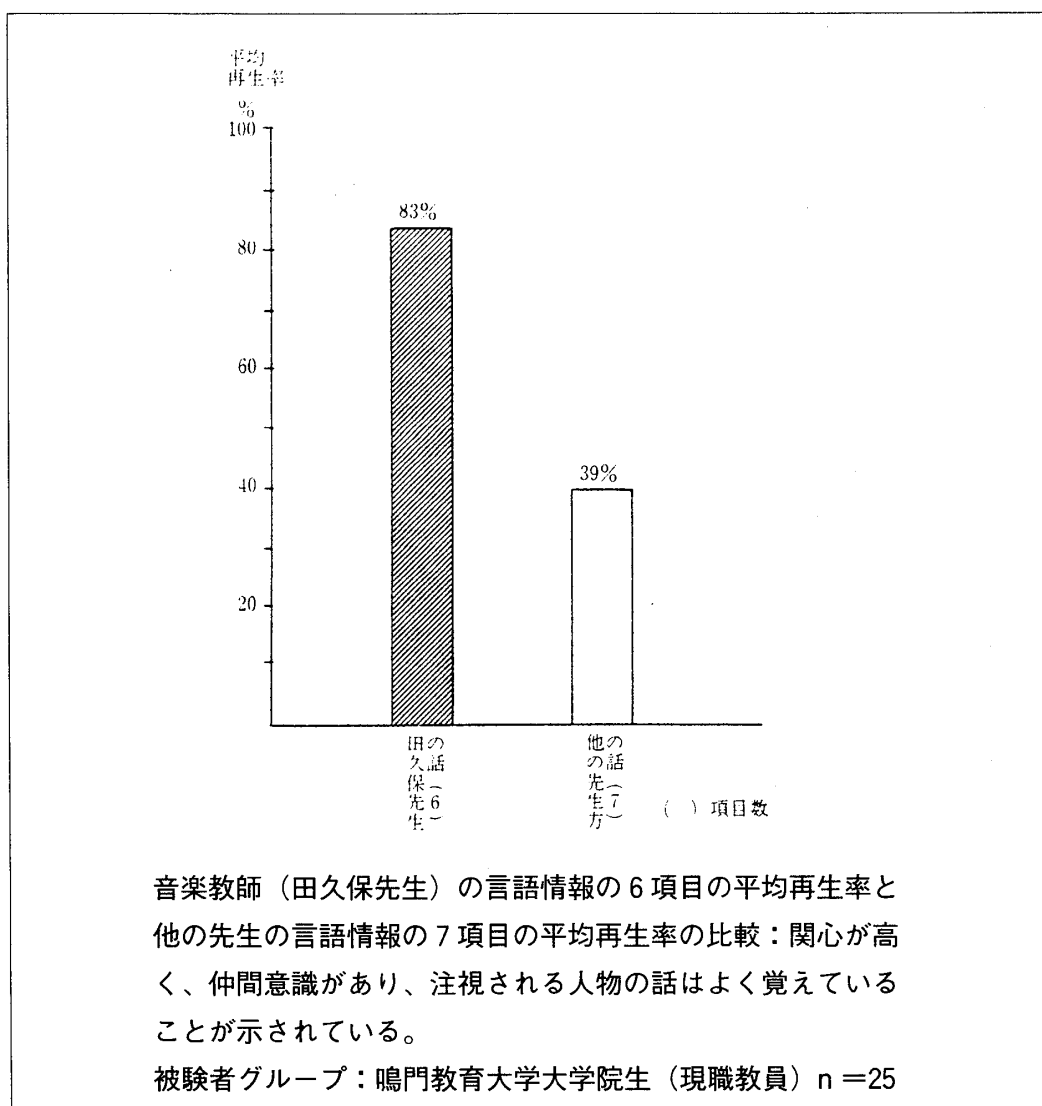


図VI-3

しかし、再生得点が平均点以上になりますと評価は一定の水準に落ち着いてまいります。ただ良かった、悪かったという印象評価で番組を評価する場合は従来は多かったんですけども、実際にその番組をどうきちんと見ているか、見てないかを調べますと、特に番組をしっかりと見ていないものほど番組はつまらない、という傾向が出ているわけです。ですから、良いとか悪いとかといっても、番組をしっかりと見て、良いと言う人と、悪いと言う人とは区別しなければならないのです。われわれの研究では初めから、その番組からどういう情報を入力しているか、してないかを、常に測定するようにいたしております。

それから番組に出てくる登場人物ですけれど、さきほど言ったオーケストラを指揮している田久保先生という音楽の先生のことですが、鳴門教育の村川先生のお世話でこのデータ取ったんですけども、鳴門教育の大学院では、現職の先生方がいられますので、その先生について番組を見ていただくと、この田久保先生はこの番組を見ている先生方の教師仲間にあたるわけですね。ですから非常に仲間意識があって同一視が行われるために、その先生の話の

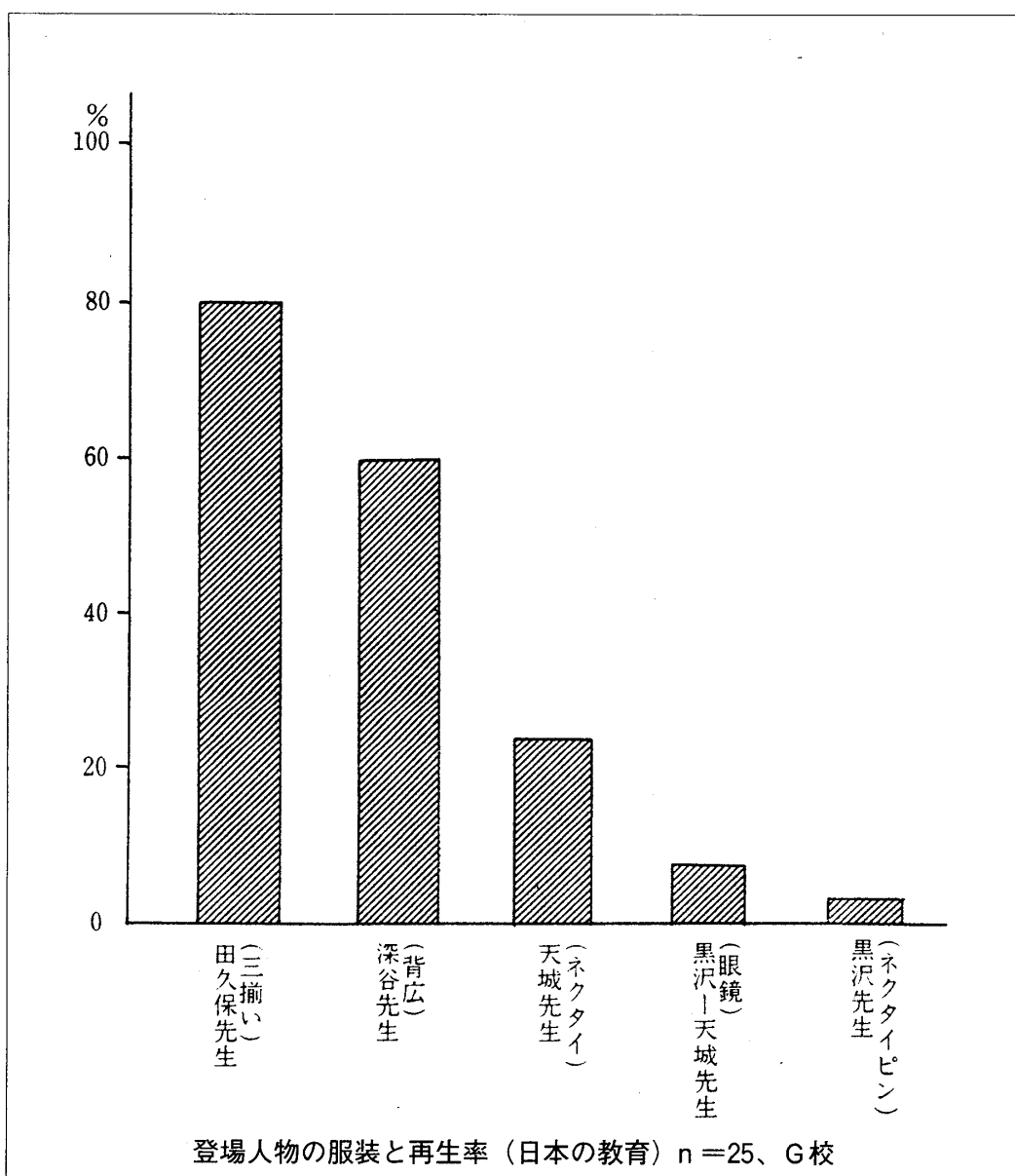
内容に関する6問の平均正答率は83%にもなるのですが、他の先生方の話しの内容に関する項目はその半分も再生してないのです（図VI-4）。



図VI-4

このことから、教育番組の登場人物というものが、視聴者に仲間意識が感じられたり、関連が強い登場人物ほど注目され、関心が持たれるということがはっきりしてまいりました。

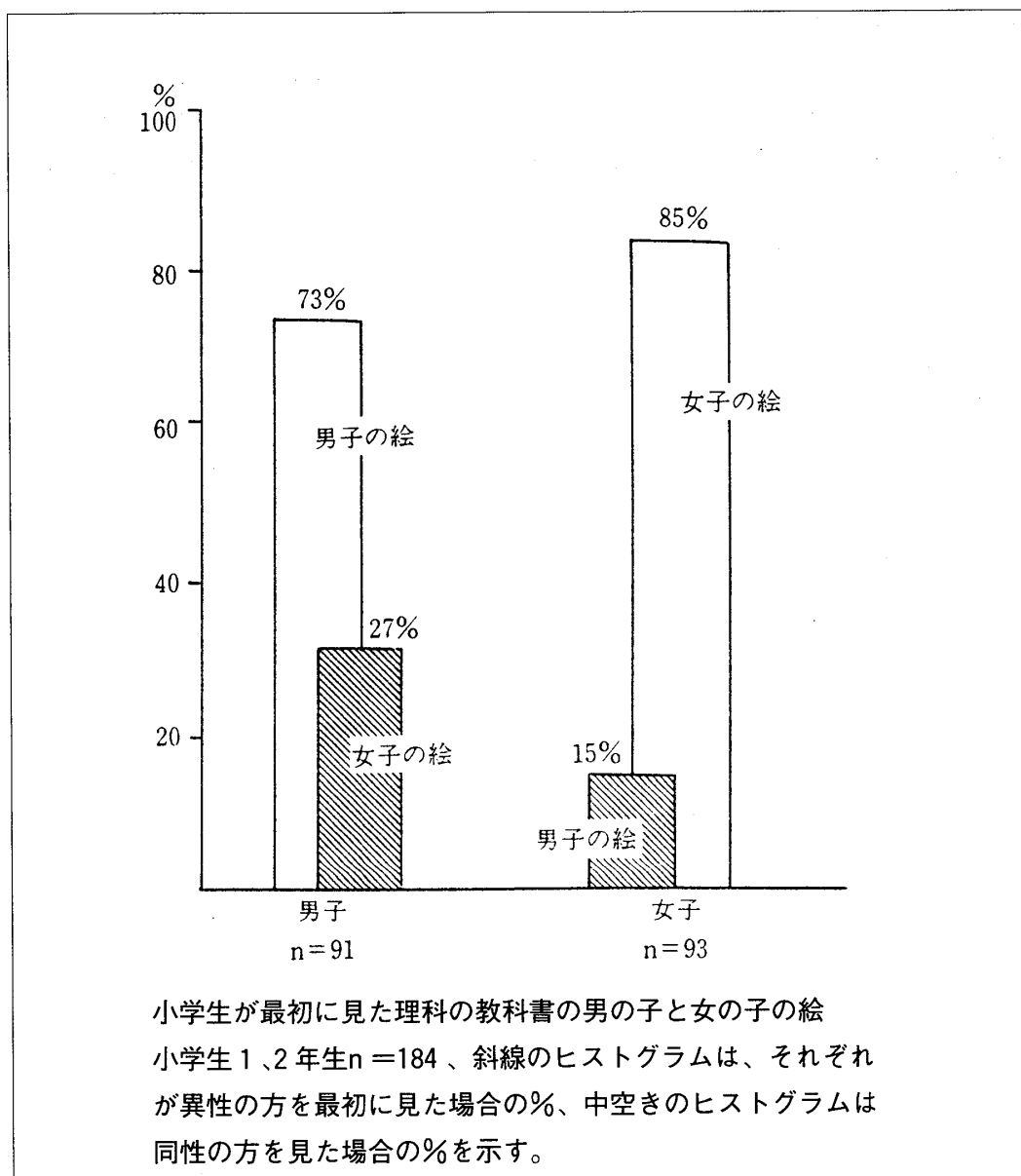
この傾向は言語的な内容ばかりではなく、服装とか姿とかを調べましても同様で、田久保先生がどういう服装をしていたとか、主任講師がどういう服装で、お客さんとして招かれた先生方がどんな様子だったかを再生させますと、さきほどの音楽の先生については80%の視聴者が、三揃えの背広でいたということも覚えているわけです（図VI-5）。



図VI-5

勿論、ビデオを見ている間は、そんなことを後から聞かれるとは誰も知らないで見てるわけですが、聞かれると正確に再生できるということは、非常に印象深く、こういった姿だとか、発言内容についても、よく覚えていることが分かります。そこに登場してくる時間もこの先生はそんなに長くなくて、主任講師の方はズーッと出てるんですけども、再生率にはこれだけの差が現れております。

このことは大人ばかりではなく、子供も調べますともっとはつきりしています。

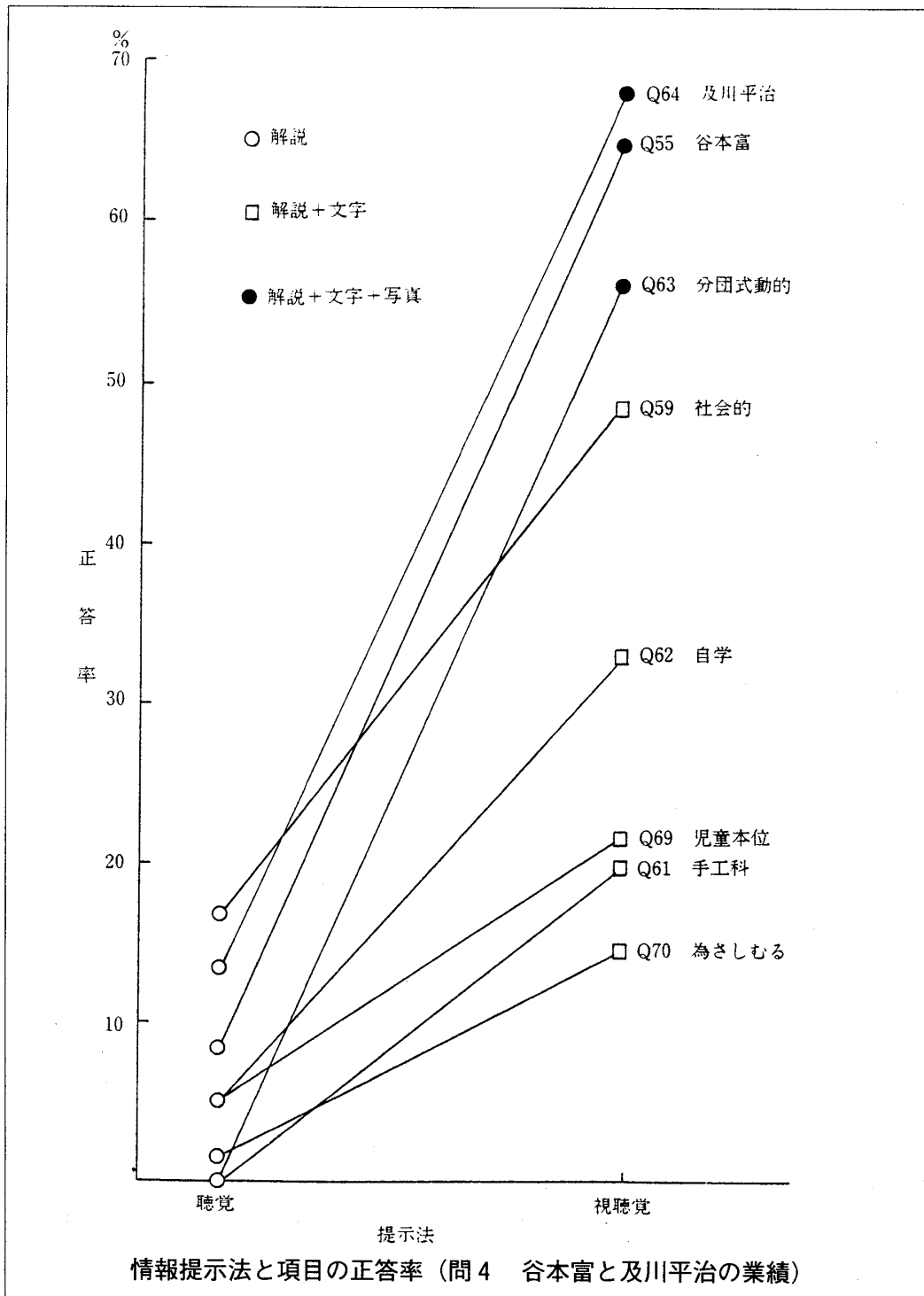


図VI-6

実はこれは(図VI-6)、私が岐阜大学で教えておりました時に、指導した学生の卒論のデータですが、小学校の理科の教科書に男の子と女の子が風船の上に乗って遊んでいる絵があります。それをスライドにして見せて、その後で最初に見たところに丸を付けなさいという問題が、略図で描いてあるのですが、男の子の73%は男の子の方を見てたので、男の子の絵に丸を付けていますが、女の子の85%はやっぱり同性の女の子を見て、そちらに丸を付けているのです。これは性のアイデンティティーで、女の子は女の子の活動に注目するし、男の子は男の子の活動に注目する傾向が強いことが示されています。勿論これは小学校の1、2年ですから、中学生の2、3年になると今度は逆転するかもしれませんが、こういうことは調べてみると、非常にはっきりと出てまいります。このことから、教育番組では、ただ教師が1人出て来てただ喋ったり、いろいろな提示をするのではなく、学習者である視聴者の立場に立ってプレゼンテーションを考えたり、学習者も加えてビデオ制作をすることも必要

であろうと思われます。

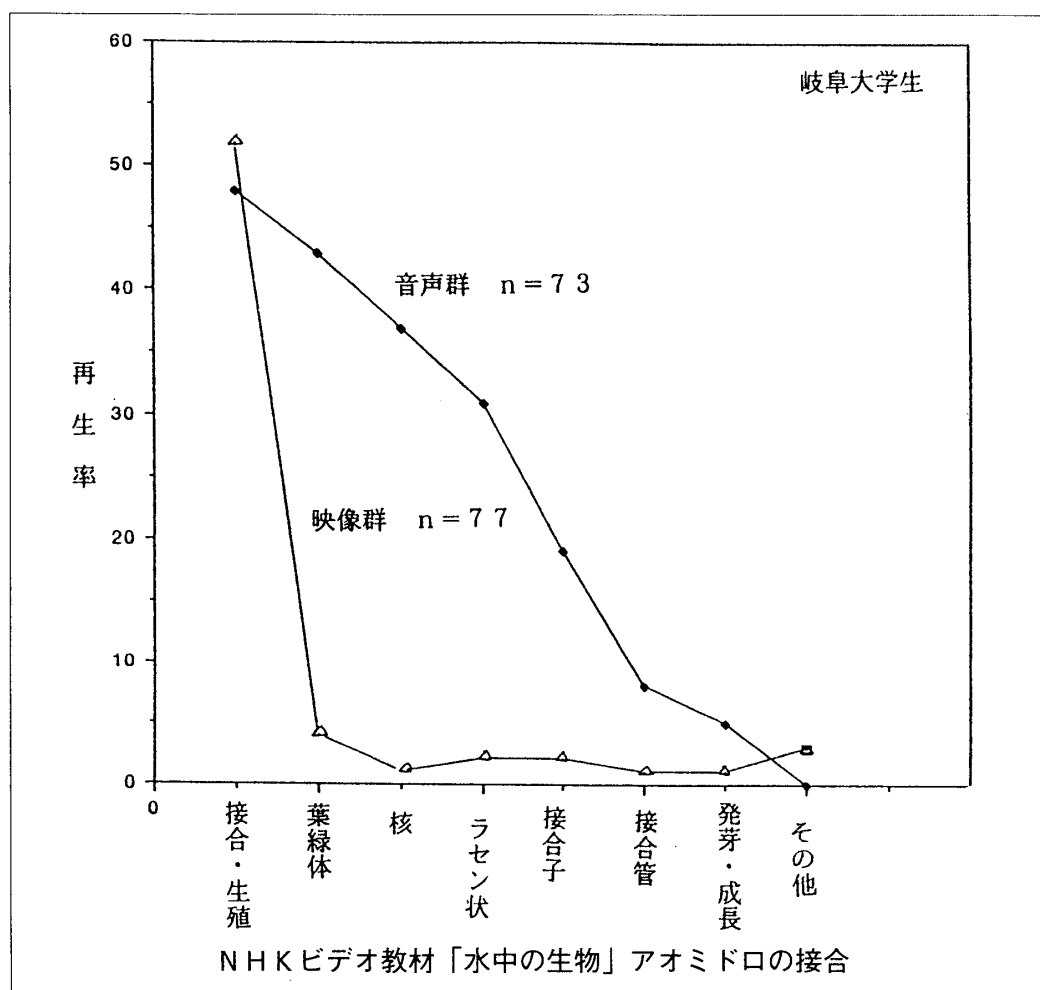
それから今度は映像を送る側の問題ですが、映像の提示は視覚的に聴覚的に、または文字をスーパーインポーズして示すと言うように、いろいろな情報提示のモダリティーを重ねて提示するわけでありまして、その多重提示と単一提示の比較をしますと、かなり大きな差が出てきました。



図VI-7

図VI-7は、同じ内容を聴覚的に提示した場合ですけれども、つまりラジオと同じ場合には再生率は20%以下です。これはキーワードとなる及川平治と谷本富という二人の大正時代の自由主義教育の先駆者ですが、その人の写真と、名前のスーパーと解説を重ねて提示しますと、なんと再生率は6倍から7倍に増えています。解説と文字で提示されたものと、この程度でかなり下がります。このように情報受容のモダリティーを重ねることによって提示された対象は非常に印象深くなるのです。こうした実験で再生率が高まるということは非常に明確に出てまいります。勿論、ビデオ教材ですと視覚と聴覚だけですけれども、それに加えて例えば、バーチャルリアリティーだとか、インターラクティブ・ビデオなどになると、視聴者側の操作が映像に加わってきて、さらに情報の定着率や、入力される情報の量も多くなると思われます。こうしたことは、これからのマルチメディアの時代では、さらにいろいろな可能性が出てくるわけですから、これからの研究課題になると思っております。

最近の学生は文字情報、受験だとか何だとかで、ほとんど文字、記号、数式などの記号変換の学習や文字偏重教育を受けているので、その影響を調べたものです。ビデオを音を出さずに見せるのです。図VI-8は、NHKの「水中の生物」という教材ビデオを見せたテストの結果です。

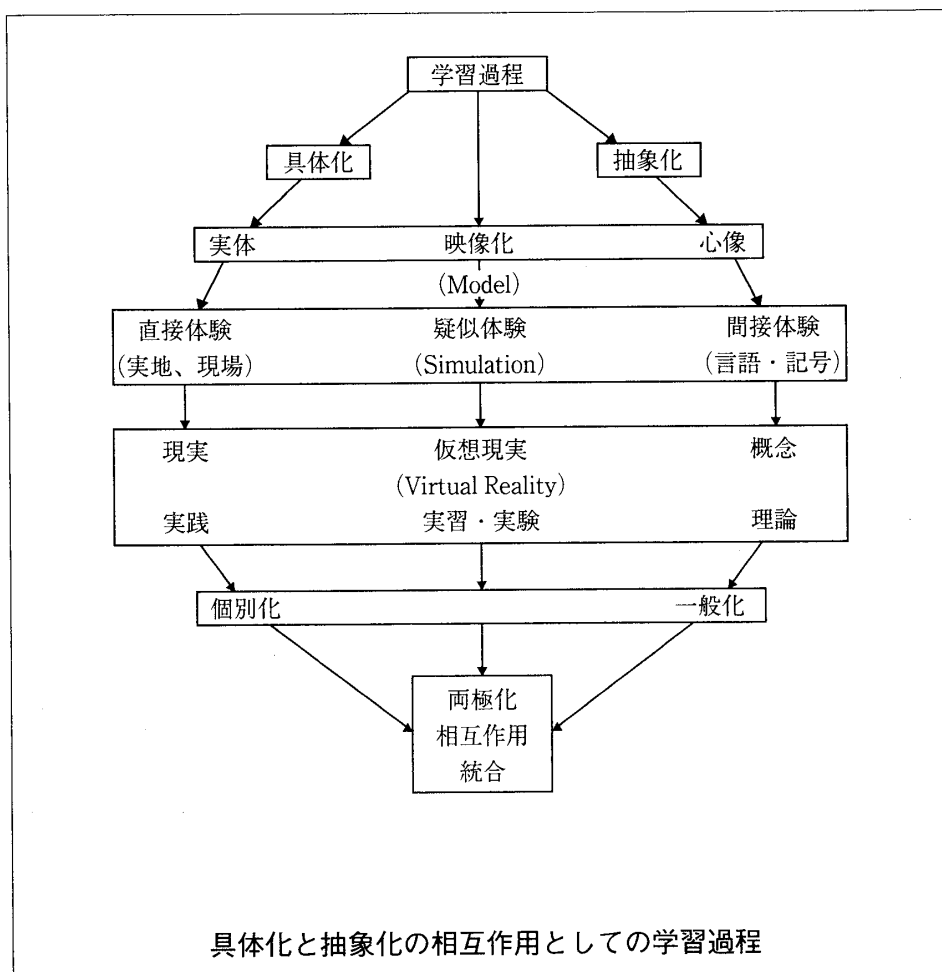


図VI-8

サイレントで見せた時が映像群の反応が△で示された折線です。これは岐阜大学の学生にやってみた結果ですが、この接合生殖というのは文字としてタイトルに出てきますので、半分ぐらいは再生するわけですが、後はほとんど文字として知っていても、葉緑体や核やラセン状の構造が大きく大寫しなっても、ほとんどこうした用語が出てこないのです。これは映像を5分ほど見た後、その映像についてシナリオを書きなさいという課題です。音声群の反応は○で示された折線で、映像なしで聞かせた場合ですが、これは映像群に比べて再生率は非常に高いのです。学生の知っている核とかラセン状構造とか接合子とか接合管とか、そういうような用語は試験に出てくるキーワードですから、次々と再生されるわけですが、映像を見てもその言葉が出てこないということは言葉と実体の乖離という現象が如実に表れていることを示しております。

私は千葉大学でも教えておりますが、そこでやっても同じ結果が出ております。このように言葉は知っているけれど、実体は非常にぼやけている、実物や映像を見せても言葉が出てこない、けれども名称を言えば「知っている」という状態は、だんだん多くなってきているのです。われわれも映像を教材を使う場合に、例えばあまり解説を加えないで映像自体を課題状況として提示し、よく考えさせる。つまり課題を持って見させるというような指導をしながら、映像から学ぶ力をつけさせることが大切だと思っています。自然というのはサイレント映画であって、自然は日本語で喋りかけてくれないのです。自然と対話をするにはどうしたらいいかを、学生に体験させながら考えさせるという指導をいろいろと試みております。

そこで、この後の全体討議のお話の枠組みの一つの手掛かりになればと思いますが、われわれが学習過程を論じる場合に、さきほどからもお話が出ているように、具体化と抽象化という学習の過程で、実態を体験させることから、これを抽象化の段階やイメージ形成の段階で、間接学習、すなわち、言語や記号の操作、概念、理論、一般化につながって来るわけがあります。一方には実体があり、直接体験があり、それが実地で行われると、そこは現実の実践が行われているわけです。しかし、ここでは、それぞれの時間と空間の制約があり、個別であるわけです。ですから、ここから個別化から一般化へ、実践から理論、具体から抽象へという両極化の間におこる相互作用と、統合をどのように考えていくかという問題になります(図VI-9)。



図VI-9

この実体を捉える情報処理の仕方、われわれが持っている情報処理の機能や構造と、それをど直接体験から間接体験、間接体験から直接体験に持って行く橋渡しとしメディアによるいろいろな疑似体験やシミュレーションが行われていると考えられます。今後は、こうした広く開けた学習環境の流れの中で、学習者の自主的な探求を尊重するような教授学習過程のプロセスを捉えていかなければならない考えている次第であります。

司会者：はい、どうもありがとうございました。今のご発題につきまして確認のための質問ありますか。はい、お願いします。

湯浅：酪農大学の湯浅でございます。聴視者の関心っておっしゃいましたですね。それからまた、話の中で「注目」という言葉をお使いになりました。あるいは別の言葉で「好奇心」だとか「興味」だとか、それから大学生ぐらいになりましてどうしても必修科目だと、そうすると嫌だけれどもとにかく消極的に、積極的にでなくて、極めて消極的に関心というか、興味とは言えないと思うんですが、それを持っていると。情報の受け手としては、いろんなそういうシチュエーションがあろうかと思うんですが、先生のお使いになっているその「関心」というのはですね・・・。

藤田：結局、データで表れたものをひっくるめて言ってるわけですけども、その中にいま先生がおっしゃたような、ニーズ、自分は面白くないけどもとにかく単位を取らなくちゃいけないから、これは絶対に成功しよう、というのもやっぱり「関心」だというふうに捉えております。つまりニーズが高い、これをやらなくちゃいけない、というようなテンションの高まりというものも、全て関心ととってございまして、そういうことからデータを処理しております。

湯浅：そうするとその場合は、例えば脳波をとるとかですね、そういうことである程度客観的に解るんでしょうか。

藤田：脳波の問題は、このセンターでもいろいろ脳波をやってる先生方いらっしゃいますが、例えば、 α 波と β 波のようなデータをすぐに学習と結びつけるのは、非常に難しいと思っております。もっと単純な睡眠だとか、それから快感だとか、眠気だとか、特に眠気のような場合には、 α 波がでやすいので、リラクゼーションのような時はいいんですが、学習の緊張度というのは、GSRを取ってやってたグループのメンバーもあつたんですが、あれはデータを取りますと統計的に非常に不安定で、反応の個人差が非常に大き過ぎるために、いい指標になっておりません。まだ集団的な指標に対しては、問題があるんですけども、今のところは自己評価ですね、自己表現といいますか、自分はこれが面白かったとか、これに関心があつたとか、これに印象深かつたというような点をひっくるめて、関心の度合いとして捉えています。

湯浅：その辺なんですけれども、東京工業大学とかあるいは自治医大でですね、そういう精神現象っていうのか、波動屋さんだと思うんですけども、あるいは生体エネルギーを非常に着目しておられる方がおられまして、

藤田：うちでも、そういうのをやっているようです。

湯浅：でしょうね。あるプレゼンテーションに対して、その聴視者がどの程度それに、エネルギー的にですね、

藤田：インボルブするかですね。

湯浅：ええ、それで客観的にできるんじゃないかという期待がありますよね。

藤田：私もそういうのがあつたらやりますけど、いろいろ教えていただきたいと思っておりますけども。

司会者：どうもありがとうございます。今の藤田先生に対するご質問を含めてですね、これまでの話題提供に関します様々な問題点ですとか、あるいは今後の指針とか、あるいはご自身の事例と照らし合わせながらご意見とかそういうものがありましたら、この先オープンにしたいと思いますので、是非お願いします。時間的には、3時までということになっておりますが、超過する可能性が濃厚になって参りましたので、3時少し廻ると思います。それから3時半からですね、このセンターのツアーがございますので、もし参加されたい方は3時30分に、これは集合はどこですかね。小会議室の前ですか。このお隣の部屋の前になりますので、もし関心のある方は3時半からのツアーにご参加下さいますようお願いいたします。それではご意見等ありましたら、どなたでも結構です。いかがでしょうか。

松岡：国際基督教大学の松岡と申しますけども、今日の会のテーマが大学の授業改善というふうにありましたので、大学での授業というか、先程、最初の方で授業と教育、教授と学生となんてなっちゃった、つまり大学で一体なされる授業というのはティーチングなのか、それともリサーチというところまで含めていくのかというふうなことのお話があったように思うのですが、今日のご発題なされた先生方の中で、大学でなされる教育というか、ご自分自身がなさってるところで、その辺のところはどういうふうには押さえていらっしゃるのかというようなところは是非お聞かせいただきたいと思っております。というのは、いろんな大学それぞれの特徴があると思うのですが、また今日の大学生の質みたいな問題があると思うのですが、やっぱり大学というのは社会的にどういうふうなところを、教育していく教育機関なのかというふうなところを見る観点からは私には欲しいなという、私自身がですね、いうふうに思っておりますので、是非その辺のことをお話がいただけたらなと思っております。

司会者：はい、ありがとうございます。最初に湯浅先生の方からのご発題の件ですね、この点につきましていかがですか、フロアーの方、パネリストの方でも結構ですが。

大場：最初に発言致しました聖隷短大の大場と申しますが、私自身はこう考えております。短大ではやっぱり短大の現実がありまして、その中で教育も研究もやるというふうなことなのではございますけれども、私は及ばずながら両方やっぱりやるべきだと思いますし、それは無関係ではないと思います。教育と研究というのは分離すべきことではないと思いますし、教育をやっている、あるいは研究をやっている中で相互にそれは作用しあうと思うのです。私は今この発題をした意図としては、やはりこれは学生により理解させるための教育研究というふうには理解しております。そのためにはどういうふうなアプローチをしていかなければいけないかというふうなことで、これはある意味で研究だろうと思っております。それは対人間との、いわゆるコミュニケーションを通しての方法論というふうな観点もあろうし、それからいわゆる内容そのものを理解させる為のアプローチというふうな観点もあると思っております。私はそういうふうには理解してやっておりますけれども。

司会者：やや、トピックはですね、教育目的に関わるものではないかと思うんですね、同

じように教えるという授業の形態をとるわけですが、その場合に多分ベーシックを身につけていくとか、あるいは単純な概念だけをインプットするような形でなくて、むしろ自分で考え、それを自分で膨らませて先に進むというような、いろんな教育の目標があるわけで、そのいずれを取っていくのか、あるいはどういうふうに関わらせるかという、そういうような問題意識で出されたんじゃないかと思うのですけれども。その点も含めて、もしありましたら、フロアーの先生方お願い致します。

伊藤：ちょっとよろしいですか。先程の続きになりますが、先程、私共の研究では概念の整理をしてないと申し上げましたけれども、その点2分法で考えていくのがよろしいのか議論の分れるところだと思います。取りあえず大学の教授学習過程というものには、どのような問題が含まれるのかという、その実態を把握するところから出発して、その中から例えば、教授なのか、教諭なのかとかそういう問題が出てくるというように、まず何が問題なのかを探るところから出発しているのが私共のアプローチです。このような発題をしていただいたことで、これからまとめていく為の視点が出来たことは大変嬉しく思っておりますが、このプロジェクトとしては特に教授だけを扱うとか、教諭だけを扱うとか、基礎的な学力だけを扱うとか、自発的な学習だけを扱うとか、そのようなことは限定しておりません。むしろそういう問題を取り出して行くのが1つと、それからやはり基礎になるのは、学習過程の中からの教授法改善というふうに申し上げましたけれども、学生の実態を知ることです。基礎学習に関してはどういう実態があって、それに対してはどういう教授法が必要なのかとか、自発的学習を促すにはどうしたらよいかというように、まず学習過程をとらえて教授を考えると、そういう視点に関しては、われわれの基本的な姿勢の中にこの議論が上手く収まっていくのではないかというふうに思います。

司会者：はい、他の先生方がいいでしょうか。はい、お願いします。

立木：シオン短大の立木と申しますが、従来大学の教育で2つの問題—リサーチの問題と既に開発された文化遺産としてのそれぞれの学問の伝達の—というのは、私なんかどう理解しているかと申しますと、例えば大学の先生が一般的に講義をなさるといふ時の状況を考えてもらうと、多数の学生の前で一方的に話すという形なわけですね。その場合には聴いている学生は元々大衆化する前はすごくレベルが高いし、意欲も高いから、自分が聴いたところから何かを発見したり、問題を見つけて、ああこういうことなんだとやって来たわけです。他方、演習とか実験とか、特に演習なんていうのは自分達で発表する側として、つまり、リサーチの場として設定されているわけですね。ところが演習の方も、従来はテキストを読んでそれを先生が解釈する、もしくはただ解釈するという、決まったやり方でズーッと購読みたいな形で来ているわけです。しかし、現在に至って非常にいろんな短大とか大学が大衆化した中で、そういう形だけで果たして学生達が、本当にリサーチといえるような問題が提起出来るのか、というところに1つは来ていると思います。先程講義の方で、生活科のことで発表された先生のことで非常に考えさせられたのですが、先生は非常に授業中に課題を一杯

出されましてやっぺらっしやる。200名の中で講義されるのは非常に一方的になりがちで、対話型にするのは非常に困難な状況だと思うのですが、先生は非常にそういう点、いろんな発問をされて学生に対して考える課題というのを与えてらっしゃるので、私としては、やはり、大学の授業の講義の中で、学生に本当に考えてもらう課題を、どの程度用意出来るか、もしくはその課題に対して答えられるような情報をどの程度与えてやれるのか、というのが大きなポイントではないかと思うわけです。だからリサーチの問題でいうと、一要するに大学と小学校の違いとなるわけですが一最近では文部省も小学生もやっぱり考えなきゃいかんという話になってきてるし、大学生はむしろ考えていないという逆転現象なんでしょうけれども、大学になったらやっぱり自分の力で考えなければと思います。小学校、中学校くらいまでは、先生から全部問題を出されるわけですね、歴史の問題でも、それから試験でも。大学になって卒論を書いたりする段階になると、自分で問題を出して解いていくっていうそういう能力が非常に要請されるわけですから、学生の方が自発的にやらない段階では、先生の方から問題なり課題なりを少しずつ与えて授業を進めるっていうのは、1つの方法ではないかというふうに思っております。

司会者：はい、ありがとうございます。今年の日教育心理学会のシンポジウムでも、大学生はなぜ質問行動をしないか、というようなことがセッションのテーマになるぐらいで、そのままですと、それまでの問題を与えられて、解いていくと言いますか、そういう役割分担のようなものが出来ている、そういう構えのまま大学に入って来るわけですけども、その点、村川先生なんか随分苦労されたんじゃないかと思うのですが、何かございますか。

村川：僕も専門が授業研究ですから、そういう意味では幼稚園から大学までのほとんどの授業を見たことあるんですが、今も出てきましたように、小学校、中学校、高校、大学といけばいくほど喋らない、自分から、自らですね。ただ、私共の大学は大学院の方がメインで、例えばうちの講座は45名の院生がいて、その内40数名が現職で学部生が3名というね、大変な、変な大学院ですけども、大学院生はビジネスエリートみたいなのが来てますので、書かせるようなことをしなくても、ギラギラした、目で話を聴いて、あてれば必ず質問もきます。問題意識の点もあるかなと思います。先程も言いましたように、初日の、半日目は「なんやしんどい」という気持ちがあるのですが、やっていると面白いと、だから最終的に200名中多分ほとんど100%の学生が、「書くのは大変しんどい」と思いながら、書くことの喜びっていいですか、「ワーツ僕って結構しっかりしていたんだな」って自己評価があったりして教職にまた目覚めなおすみたいな反応もあったりします。だから大学生は決して考えないんじゃないくて、そういう機会を与えてこなかったし、そういう点をクリアすれば、やはり相当優秀なんじゃないかなと考えてます。

それからあと1つ、先程の藤田先生の発表とも絡まるんですが、私は私なりに授業をいろいろ工夫しているんですが、その基本的な考え方は、自分は放送教育研究というのをやってきまして、番組制作にも若干、横目に関わったこともありますし、番組分析したことあります。そういう、やっぱりよく見られる番組はどのような構造でというか、工夫の元に作られ

てるのかということ参考にしまして、授業を構成しています。そういう意味で藤田先生が、先程、番組評価のような形で学習者との関連を述べられたんですが、これはそのまま授業設計と番組制作の共通点というところで、実は先生の研究はそのまま大学教授法をどんなふう工夫していくかということにも、フィードバックできるんじゃないか。折角こういうセンターがあるんですから、大学の授業研究とそれから放送番組研究の接点は大変強いので、是非そこら辺を今後検討して欲しいなと思います。

司会者：センターの宣伝まで含めていただきましてありがとうございます。今のご意見につきまして何かフィードバックございますか。

湯浅：今おっしゃった通りだと私も思うんですね。大衆化してて、その逆転現象しててというのは、やっぱり世の中がそういうふうにしてるんじゃないかと思うんですね。学生や生徒が悪いのではなくて、むしろわれわれ大人がつくった現代の日本の社会問題であると、そんなふうには私は思ってます。その点から見ますと、むしろ昔の旧制高校とかですね、そして旧制の帝国大学、このシステムの方がいいと思うんですね。と申しますのは、学生遊びたいんですよ、とにかく1年生、2年生は。今までもうとにかく詰め込みで勉強させられて、だから要するに嫌々ながら勉強してきてるわけです、ずっと、勉強させられてきてるわけですね、それは私、現実だと思うんですね。そこでどういうふうにそれを転換させて、エデュケートするかっていうことがポイントだろうと私は思ってるんですね。だから単に、何て言うんですか、いわゆる教育をするのであれば、「試験に出すぞ。」と言えぱですね、一言でそのことに関しては関心持って、今まで試験試験できていますから、勉強するんですね、だけどそれしかないわけです。そのパターンで幾らやっても人材は、育成することにならんような気がするんですね。そこが最大のポイントだと思うんです。やはり大学というところは基本的に、短大も含めてですけれども、卒論っていうのがあるわけで、うちも短大併設してますけれども、大学の研究室と不離不干の関係で、中には卒論をやってる短大の子もいますけれども、要するに卒論をやると、卒論の為のというような視点でレクチャーなり、あるいは実習をやっていくかどうかという。逆に、資格を取らせると、あるいは合格率を上げると、そういう観点でやっていくか、そこがお互いにどうすればいいかっていう、私共なんかは獣医学校の私学ですから、いろいろ議論の的になるとこなんです。オール・オア・ナッシングじゃないと思うんですけれども、その辺のやっぱり相手をみての、私達のバランスの取り方みたいなところが現実だろうなと、そんなふうには私は思ってますけど。

司会者：はい、今回のテーマの大学の授業改善ということについての、非常に重要な視点をこういう形でいただいていると思うのですけれども、時間がもうなくなって参りました。最後に言い残したこととか、あるいはフロアーの方で是非おっしゃりたいこと、今までのトピックとは離れてもいいと思うんですけれども、もしありましたら何かお願い致します。よろしいでしょうか。はい、お願いします。

松岡：国際基督教大学の松岡です。今日の中で、今ちょっと議論になった大学教育の目的みたいなところに関係することと、つまり授業の内容のことですよね、それからもう1つは、授業の手段というか方法でどんなふうな改善ができるかというふうなお話があったと思うのですが、例えばVTRとかOHPとか、映像化するということが大変今日的な課題になっているような気は致しますけれども、それは学生達にある意味で迎合することになってはいけいないんじゃないかなっていう気が私はしてるんですね。と言うのは、スツとこう見てああ解ったって気になってしまうんだけど、本当は何も解っていない。私達がそういうふうなことを打ち出していけばいくほど、私共ある意味では無理をしてですね、一生懸命新しい技術に追いつこうとして、学生達がそういうことで育ってきたんだってやればやるほど、学生達にはすんなり受け入れられるけれど、本当に伝えること、教育の中身が伝わっていかなくて、表面的なことだけで終わってしまうということが、起きてきはしないだろうか。受け入れやすいんじゃないかと、やっぱり学生達がそれを自分のものにしていくにはどうしたらいいのかってなことが、やはり考えられなくてはいけいないんじゃないかなというふうなことを、ちょっと私ここで考えましたということです。

司会者：新しいメディアによって授業方法を変えていくところに目を奪われがちですが、それによって本質的な関わりというものが失われる可能性はないかという、そういうご指摘だと思うのですが、一言ございますか、何か。

大場：聖隷短大の大場と申します。今の方の意見に、非常に僕もある意味で同感だと思ひまして、一言発言させていただきたいのですが。われわれがどうしてもですね限られた時間の中で何かを理解させようとする、やはり解りやすくするにはどうしたらいいかっていう視点がまず1つは挙がってくるんですね。これは1つの視点として大事なことだと思うのですが、それと同時に、やはりあまり解りやすくさせてはいけないという、つまり解りやすくというのはある意味では学生自身が考えないという傾向を生み出すといひますか、一方ではそういう危険性があると思ひます。私はある意味で学生には、一旦今までの授業や勉強方法というのをバラバラにしてしまつて、改めて大学での授業というものを、勉強方法というものを考えていただきたいと、そういう意図をもって1つの科目をやつていこうと思つておるわけですね。以上です。

司会者：はい、村川先生お願いします。

村川：私もですね、生活科という馴染みのない教科を、学生に教えるのにやはり具体的なもので、映像で、私の考えはまず解ってもらえないことには考え始めれないと思つておりますので、いかに解りやすくするかということ全体をテーマにしています。ただ視聴覚教材を使う時の欠点というのは、やはり受け身的になってしまうということなので、視聴覚教材を使つたら、他の活動といひますか、先程言ひましたように、考える、書く、そして発表するそういう点を絡めることによって、よりその視聴覚教材の持っている特性が発揮されるん

じゃないか、というふうに考えております。

湯浅：ちょっと別の視点で、

司会者：出来ましたら他の先生方をお願いしたいと思います。

松岡：松岡ですけども、実は学生に対する授業評価なんかやりますね、今のようにビデオを使ったり、OHPを使ったり、それからプリントなんかを配る、そうすると学生は先生はよく授業の用意をしたといい評価をしてくれるんです。でも実際にじゃあ試験をしてみて私が聞きたいことを、学んで欲しいことがどれだけ理解できたかという、それは必ずしも一致しないようなことが起きてしまっている。それから、何かこう学生が受け入れやすいということ、本当に学生がその知識が身に付いたり、大学の授業として目的が適ってるかどうかということについては、慎重に考える必要があるなっていうふうに、私自身考えているということです。

司会者：はい、一番後ろの女性の方。

松村：奈良教育大学の松村と申します。先程からメディアのいろいろな提示を見ていました大変面白いというか、現代の学生達の興味にあったようなプログラムとか、開発がなされてると思うのですが、自然科学なんかではやはり、見て感動する部分とそれから実際にやってみて感動する、そういうエモーションというのは全然別のもの、強度が別だと思うので、その辺のことはメディアで教材を作るというのは、非常にそのこの役割分担っていうのを、非常に大学の授業の中でははっきりしないといけないと思います。1つはライブラリーとしての教材というのを、もう少し積極的に、そういうものがあれば例えば概念形成、あるいは自然に対するいろいろなことを自分で検索してみると、そういう機会を与えるという方が、むしろ探求的なところには役に立つのではないか、というような感じがしておりますので、そういう役割分担をしながら開発していくということを、希望したいと思います。

司会者：はい、ありがとうございます。はい、その女性の方。

平田：関西学院大学の平田と申します。いろいろな事例の報告で、興味深く聞かせていただいたんですけども、1つもうちょっと視点的にこういう研究をしていただきたいことがあるんですけど。大学全体として授業をどういうふうに改善していくかということを考えた場合に、ここに来られないような他の先生方が、果たしてどういふような授業に対するスタンスを持っているとか、学生自身が大学の教育とかそういうものに対して、どういうスタンスというか、何を望んでいるとか、そういうことに関するもうちょっと全体像をとら捉えるような、そういうような研究がないと、一般的な意味での授業の改善とか、そういうような話が難しいと思うんですね。ですからできたらそういうことも、特にこういう共同研究

機関みたいなどで、日本の大学全体で大学の教員というのが、どういうふうな授業と研究のバランスを考えてるのかとかですね、教育というのに、どういうふうなスタンスを持っているのかというのを、研究していただきたいなというふうに、ちょっと思いました。

司会者：はい、大切なテーマをいただきましてありがとうございます。時間が本当にもう3時30分のツアーに押し迫って参りましたので、ここで一旦打ち止めにいたしまして、今日、発題された先生方と個人的にお話をされたい方は、是非その時間をおとり下さい。それからお手元にありますこのアンケート用紙に、是非お応えいただきまして、後ろにボックスを用意しておりますので、そちらの方にお入れいただきますようお願いいたします。それからもう1点、まだ受付をお済ませでない方は、この研究会終了後に受付の方を出口のところでお願いします。

では、大変長い間、いろんな発表がありましたけれども、貴重なご意見をいただきましたお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。